

愛知の博物館 No. 27



渥美灰釉芦鷺文三耳壺

目 次

◦ 日本陶磁公苑への夢と悩み.....	溝 口 豊.....2
◦ 文化財と曝涼.....	山 田 蓉.....3
◦ 4ヶ月目の博物館体験レポート.....	神 崎 か ず 子.....5
◦ 昭和55年度愛博協総会報告.....	6
◦ 協 会 記 事.....	7

『日本陶磁公苑』への夢と悩み

溝 口 豊

愛知県陶磁資料館は、陶磁の町・瀬戸市といつても愛知郡長久手町にある愛知県青少年公園の北側を東西に走る猿投グリーンロードのすぐ北麓にあり、あたり一帯の樹海にボッカリと巨大な英姿（南館）が浮び上ったのは、昭和53年6月のことである。その開館の思想を前桑原知事さんは『桑原幹根回顧』（毎日新聞社刊行）の『会館知事』の冒頭で『楽しみ陶磁資料館』として次のような経緯や抱負をのべていられる。

「6月1日は、瀬戸市の一角に出来た県の陶磁資料館が開館した日でした。私も招待を受けて行きましたが、縁に包まれた環境と落ち付いた建物は、なかなか良かった。長久手町の青少年公園から通ずる道路も快適で評判はよろしいですね。青少年公園が文字通り、青少年や若い家族づれの楽しむ動の施設なら、陶磁資料館はゆっくりくつろいで過ごせる大人の静の施設ですね。今度の完成は産業展示棟だけですが、将来は充実したい施設になると楽しみにしています。……」また資料館建設委員の一人で陶磁器研究家の本多静夫先生は、「もう20年近くになりますか。？猿投窯発掘がきっかけで、どうしても世界に誇る展示館が欲しいと夢みたいに考えていました。だがね、まだこれからですよ。ようやくスープが出来たところで、ビフテキはしばらく先ですね。」と記者団に語られ、『愛知県陶磁資料館』（図録・毎日新聞社刊行）の序文には、「……従来の博物館や資料館のイメージに煩わされない愛称『日本陶磁公苑』と呼びたい……」と資料館の基本構想とその抱負をのべていられる。

このような夢と期待をもって誕生した資料館は、翌54年10月待望の本館棟が完成し『東洋の陶磁展』『ブランド展』をテーマにオープンした。いささか自画自賛ではあるが、中国、朝鮮、日本のそれぞれを代表する名品も出展させていただいたせいもあって仲々の好評を博した。

この陶磁資料館の運営を担当する私どものつとめは、当資料館の基本方針を踏まえて、資料館が単に愛知県だけの物にとどまるのではなく、また、一つの歴史博物館に終らせる事のないように、次の三つの柱にそって、正に愛される『日本陶磁公苑』となるべく20名の館員が力を合わせて、その夢の実現に一步一歩近づいてゆくことにある。

<三つの柱>

一、陶磁に関する歴史博物館

- (一) 資料収集と保管（・陶磁器の完品や陶片・文献、図録等陶磁に関する情報）
- (二) 調査研究と展示（・調査研究こそ学芸員の使命であり、その成果を如何にわかりやすく展示するかの工夫）

二、陶磁器産業の振興とその拠点

- (一) 現代窯業のプロムナード（日用食器からニューセラミックまで）
- (二) 陶芸の創作とその拠点としての実技棟

三、住民に親しまれるレジャー施設

- (一) 陶芸教室としての実技棟

- (一) 茶室の建設
- (二) 古窯の復元
- (三) 遊歩道・庭園などの環境整備等々

これらを基本構想をふまえて、それぞれ整備充実してゆくことは、オイルショック以来の財政難や、とかく「トカゲの尻尾」になりがちな文化に対する日本人的感覚の中では、極めて困難なことではあるが、ゆるされた予算の範囲内で知恵を絞り合って進んでゆく必要がある。

昭和53年6月1日、南館のオープン以来早くも2年有余の月日が流れ去ってしまった。その間、南館、本館のオープン行事、常設展・部門展・特別展の開催に館員一同無我夢中で駆けずり廻っていた感があり、暗中模索のくり返しでもあった。一面それなりの成果は有ったとも思う。『日本陶磁公苑』への夢はまだまだほど遠いものがある。

しかし、その道は如何に険しく遠くとも、この陶磁資料館を日本陶磁のメッカとして、また巴里のモンマルトルの丘に学ぶ画生たちのように、あるものはデッサンに、あるものは陶作に、あるものはレディーの場として、人間のいとなみに活力を与えてくれる文化施設として、多くのひとびとに愛され親しまれる公苑にするよう、あせらず、止まらず前進してゆく覚悟でいる。

それには、ロジカルな情報をできるだけ集めて、啓蒙と教育の役を果たすべき施設になるよう館員の奮起はもちろん、大方の諸氏の御指導、御鞭撻、御協力を伏してお願いする次第である。

〈愛知県陶磁資料館 副館長〉

文化財と曝涼

山田 蓉

曝涼とは、書籍、衣類などを日に干し風に当て、徽、蟲喰などを防ぐことで、古くより「虫払い」「風入」「土用干」の名で親しまれているが、現在ではあまり曝涼と言う言葉は使われない様である。

曝涼は、すでに『令集解』や『延喜式』や又『西宮記』『江家次第』にも見えて、宮中をはじめとして、兵器の虫干し、屏風、調度品の風入が年中行事として7月7日に行なわれていた事が知られている。もちろん神社仏閣に於ても例外でなく『雍州府志』に、北野宮（現京都北野天満宮）では7月6日に外陣に所蔵されている宝物類を西間・幣殿・會所において曝涼を行い外陣の煤払を行っている。

しかし、これは単なる虫干しでない事はもちろんで、一つの祭りである。即ち神前に穀葉を獻じて七夕祭の歌を詠う。この事は神宝が神様の調度品であることから起因しているのはもちろんであるが、今に残る各神社の蟲送りの神事を見ても、害虫の災を免れるための神事として祭りが行なわれているところからみると祈願の意味も合せ持っているものか。

多くは盆の前後、稻の花盛りの頃に行なわれ、各地多少その方法に差はあるが、かなり古い時代からの習俗として、神前で祓を修し、夜に入れば松明を点じ鉦・太鼓を鳴らし、空銃を放ち、螺を吹き、田の畦を巡りつゝ小竹を以て田の上を掃ひつゝ道むもので、田の害虫を払う夏

の大事な行事である。

現在でもこれに類似した型の祭りは多く、島根県美保神社では現在でも7月7日深夜外陣の宝物類を拝殿に列べ、太鼓・鼓を打鳴らし、笛を吹き虫払をする虫探神事が行なわれている。その他全国各社でこの種の神事が多い。

7月7日はその他、七夕・索餅・乞巧奠・七遊等の行事は多く、虫害除や健康を祈る行事で、これも夏盛りを無事乗り切る事を祈る行事と考えてよからう。

我国の夏はこの様に物だけでなく人体にとっても大変な季節である事はもちろんであるが、殊に文化財にとって虫害の最大危機でもある。

文化財破損の要因には色々あり、外力による要因の他、温度・湿度・光を始めとして、黴・バクテリア・虫害・塵埃等があるが、特に我国における文化財破損の多くが黴・虫害によるものが多く、夏期における高温多湿はこの要因を誘発する時期である。乾性のカビは、 $60\% 25^{\circ}\text{C}$ ・ $90\% 15^{\circ}\text{C}$ を境にして増加し、又湿性カビは $80\% 25^{\circ}\text{C}$ ・ $90\% 15^{\circ}\text{C}$ で異常に発生する。又虫害は $80\% 25^{\circ}\text{C}$ を中心として輪型状に拡大する。これを我国の年間温湿度に合せてみると実に6月・7月・8月・9月と1年の内ものがこの危険な時期に入るといえる。これを防ぐため、先人は、古くより曝涼という知恵を持って文化財の破損を防いで来た。

熱田神宮においても、曝涼の事が見える。当宮に関する最も古い史料としては、「張州雑志」所収の文明17年（1485）年中行事で、7月7日に大宮司以下出仕し御供を献じ、祭文殿において宝物の風入を実施している。この事は後の代にも受継がれ、天野信景著の『塩尻』には、この曝涼の事を詳しく記している。

現在この宝物虫払いの神事は途絶えているが、恐らくは一般参拝者や国学者、絵師等はこれらの宝物を参觀する機会を得たと考えられ、今でいう展観会的様相を呈していたものと思われる。現在当社の宝物類が史料に紹介されているのもこの曝涼による事も一要因といってよからう。我国を代表する正倉院御物も今では秋の一大展観会となっている。正倉院展も実はこの曝涼を兼ねている事は周知の通りで、これら貴重な文化財が、神社仏閣を中心として今日に受継がれているものもやはり祖先が残した曝涼という慣習があったからで、祖先の知恵に感謝せずに居られない氣持でいっぱいである。

熱田神宮の宝物類は現在宝物館収蔵庫に保存され、展示を通して一般に供しているが、この文化財保存の心は何も最近始まった事でなく、古くより先人は、我国の気候条件に合った保存対策を実施していた訳で、その心持は今も昔も何ら變るところがあるとは思わない。

時折宝物館展示の折、所蔵されている宝物類の中でも平安・鎌倉期の刀剣・舞楽面・室町期の古神宝類等を取り扱うにあたって、よくぞ今日まで受継がれたものだと感謝の念で一杯で、これら文化財を愛した先人の心が少しづつ理解できる様な気持ちになった昨今である。

（熱田神宮宝物係長）

4ヶ月目の博物館体験レポート

— 学芸員見習生 4ヶ月の感想文 —

神崎かず子

今月（7月）9日、名古屋市博物館で天理参考館50年記念特別展を観てきました。展示とともに楽しく、興味深く、時には興奮しながら、展示室をめぐりました。それからその興奮のあい間をぬって、ぬかりなく展示品以外のものも観察してきました。展示品のネーミングやパネルの位置、サイズ、また照度や展示台などの備品といったふうに。これは昭和美術館に籍を置くようになって以来のことです。つまりこの4月から4ヶ月のうちに、私にとって博物館で見るべきところがこれだけふえていたのです。

それまでは、博物館で観るものといえば、展示品と気が向けばネームプレートくらいでした。あとは絵ハガキ売場やロビーで観覧後の余韻にひたるといったぐあいで、それもあくまで展示についてどうこう思う、という程度のものでした。それから4ヶ月、環境がかわれば観るところもかわるということでしょうか。今回は展示品ばかりでなく、その展示の工夫やらテーマの展開にも注意を払うように気をつけました。また、展示の状態にも興味があったので、ケース内の温湿度計の目盛も読んできました。（もっともこれは、我ながらちょっと恥しい気がしましたが。）それからまだ他にも展示品以外のこまごまとしたことを見つけては、変に感心してきたのでした。

けれども今はこれをちょっと反省しています。それは、展示をそれとして見ていなかったということと、展示以外のことに気が散ってしまってじっと集中してものを観ることをしなかったということ、からです。これに気づいたのはしばらく後のこと。展示室内で見たり聞いたりしたほかの観覧者たちの様子をふと思い出した時でした。

たとえば、展示品をパネルの年表や地図と見合わせて、しきりに感嘆の声をあげている人たちがいました。それから、父親らしき人が何やら説明をしている家族風景も見かけました。また、スケッチに忙しい学生たちや、図録を片手に見比べている人たちも。ようするに、彼らは展示品を実によく見ているのです。そしてまた、それがそれぞれの視点から、様々な思い入れをこめて理解しようとしているのです。このことは、反省へのきっかけであったと同時に、ある発見もありました。つまり、観覧者が思いのほかきびしい観察者でもあるということ、そしてまた、自分なりに展示を解説しようとする熱心な勉強家でもあるということ、です。けれども意外に思えたのは、彼らが展示に関する質問をほとんどしようとしないことでした。たとえば、今回偶然にも学芸員の方に展示室で質問することができたのですが、その質問を立ち止まって聞いてゆく人は数人。それでも私としては、後続の質問を期待していたのです。でもこれも不発。ちょっと拍子抜けの感じでした。仲間同志での、あの活発なやりとりとは対照的です。そこでちょっと無気味なのは、この無表情な反応だと、私などは思うのです。まったく何を考えているのかわからなくて、とらえどころがない。にもかかわらず、私がこれからずっととかかわってゆかねばならないのも、その彼らであるというわけです。

このように4ヶ月目の博物館体験は、自身の視点の変化を自覚させるとともに、大いに反省をうながすものとなりました。それからまた、仕事相手もどうやら見えてきたようです。正体不明の不特定多数で、なかなか手ごわい感じです。けれども、4ヶ月目にしてたったこれだけしか見れなかった、という気がしています。あとまだどういったものがひかえているのか、当分は息をひそめて見守ってゆこうと思います。現在、不安と期待、であります。

〈昭和美術館 学芸員〉

昭和55年度愛知県博物館協会総会報告

5月20日（火）に知多市民俗資料館にて31名の出席により今年度の総会が開催されました。
あらましは、以下のとおりです。

1. 会長あいさつ 愛知県文化会館長 片山和夫
2. 来賓あいさつ 愛知県教育委員会文化財課主査 服部鉄治
3. 開催館あいさつ 知多市教育委員会社会教育課長 後藤律次
4. 表彰
功労賞 德川美術館学芸課長 跡部佳子
市立名古屋科学館天文係長 山田博
- 奨励賞 博物館明治村斑長 小村幸男
徳川美術館学芸課員 佐藤豊三

5. 議題

- (1) 昭和54年度事業報告及び決算報告
異議なしの声により承認される。
- (2) 役員改選
昭和53・54年度役員全員が再選される。（名簿のとおり）
- (3) 昭和55年度事業計画及び予算案
異議なしの声により承認される。
- (4) 規約の一部改正について
協会費の値上は、倍額で昭和56年度から実施ということで承認される。
(私立・町村立は4千円、県立・市立の施設は8千円になります。)
- (5) その他

新加盟館あいさつ

豊橋市美術博物館 館長 白井昭吾
名古屋市見晴台考古資料館 事業係長 高木進
蒲郡市郷土資料館 館長 伊藤嘉典

この他に、博物館治村から御出席の皆様にお願いということで「博物館関係の研修会等には出来るかぎり参加させるように努力してほしい。」という要望が出されました。

このあと知多市民俗資料館の展示室を見学して盛会のうちに終了しました。

なお、この総会の開催につきましては、知多市民俗資料館の榎原館長さんを始め係長の竹内さん・学芸員の山原さん・主事の森岡さんの多大なるご協力を得ました。

愛知県博物館協会役員名簿

役職名	館 名	代表者名	役職名	館 名	代表者名
会長	愛知県文化会館	館長 片山和夫	理事	荒木集成館	館長 荒木 実
副会長	御園天文学センター	所長 金子 功	〃	豊田市郷土資料館	館長 木戸 真生
理事	財団法人 日本モンキーセンター	所長 四出井綱英	〃	鳳来寺山自然科学博物館	館長 星野 雅良
〃	博物館明治村	館長 関野 克	〃	東海市立平洲記念館 郷土資料館	館長 小島 三郎
〃	市立名古屋科学館	館長 佐藤 知雄	〃	名古屋市博物館	館長 浅井 肇一
〃	徳川美術館	館長 徳川 義宣	監事	名古屋城管理事務所	所長 小塙 誠
〃	熱田神宮宝物館	館長 岡本 健治	〃	切支丹遺蹟博物館	館長 佐藤よしあき

事務局だより

- 6月20日に愛知県文化会館前文化事業部長川島敏一に本協会への永年の貢献に対し感謝状が渡されました。
- 6月から大府市歴史民俗資料館が新しく協会に加盟しました。所在地は、大府市桃山町5丁目180-1で、総称大倉会館という施設の中にあり、現在職員はすでに勤務していますが、開館は11月1日の予定です。なお、電話番号は〈0562〉48-1809です。
- 6月26日・27日に、神奈川県立博物館に於て東海地区博物館連絡協議会総会が開催されました。愛知県からは、9館11名の方が参加されました。

表紙写真

重要文化財

芦鷺文三耳壺 濡美窯 平安時代

高 39.3cm、口径 16.5cm、胴径 34.0cm、底径 13.5cm

砂質に富んだ灰黄色の荒い素地で、紐土巻き上げ後、外面を木型で叩き締めた圧痕がそのまま残されていて、濡美窯産であることが明確である。肩につけられた三箇の耳は、平安期特有の縦耳で、細い粘土紐を2本合わせ、上下に菊座を設けている。文様は、肩の上端と胴との境に二重の沈線をひいた文様帶を縦線で三分割して描かれている。その二面は花文で、一面に流水芦鷺風の文様がある。このような題材は、平安後期から鎌倉時代にかけて各種の器物の文様に用いられており、その流麗な筆致や描写からみて、かなりすぐれた絵師の手になるものではないかと考えられる。

浅田員由 <愛知県陶磁資料館 学芸員>

「愛知の博物館」 No. 27

発行日 昭和55年9月

編集・発行 愛知県博物館協会
名古屋市東区東桜一丁目12番1号
愛知県文化会館内
<052> 971-5511